情報科の授業における「朝日けんさくくん」の活用

―アカデミックリテラシー養成を目指して―

半田　亨

＜抄　録＞

本校１年生の「情報の科学」の授業は，基礎的なアカデミックリテラシー養成を目標として展開している。本校は早稲田大学の全入制附属高校であるが，開校以来生徒全員に大学推薦の必要条件として卒業論文を課している。この前段階教育として効果を上げていると考えている。論文作成においてよい資料を集め分析することは必須であるが，新聞記事データベースである「朝日けんさくくん」が大きく役立っている。

＜キーワード＞

アカデミックリテラシー，資料検索，新聞記事データベース

1　予備知識

早稲田大学本庄高等学院は早稲田大学開校100周年を記念して，埼玉県本庄市郊外の丘陵地に設立された附属高校である。卒業した者は全員早稲田大学へ進学できる。開校以来，生徒全員に20000字（A4版16枚程度に相当）以上の卒業論文を課しており，これを提出することが大学進学の必要条件となっている。

2002年度の新指導要領施行で新教科として「情報科」「総合学習科」が導入された際，情報科を担当することになった私は，カリキュラムをどうするか？について考えた。当時は情報科の授業をどう展開するかについて実践例が少なく，どの学校も手探り状態であった。また，本校は附属校であるため，受験して大学に入学した学生にはない，しかも即戦力として幅広く役立つスキルや知識を与えたいと思っていた。カリキュラム編成上，本校では情報科必修２単位を１年と２年に分けて1単位ずつ実施することとなった。そのため，指導要領の内容を踏まえつつ，１年ではアカデミックリテラシーの基本を，２年時には情報発信技術を中心に授業を展開することとした。１年時の内容を，その後他教科で課されるであろうレポートやプレゼンテーション，そして卒業論文に役立ててくれることを期待した。

2　1年時情報科のカリキュラム

本校で実践している１年時情報科の授業の内容は凡そ以下の通りである。

○「私が今，はまっているもの」

１学期の成績の主たるものとなる。

自分が魅力を感じている趣味や場所・活動等を紹介するPPTスライドを作らせ，全員に３分間のプレゼンテーションを課している。それ以前は１年生ということもあり，自己紹介をPPTでさせていたが，血液型・誕生日・出身校等皆同じ内容になりつまらなかったため，このようなテーマにした。

スライドデザインの基本，引用参考等著作権への配慮，プレゼンテーションスキルを教えている。

○「身の回りの？なもの」

２学期の成績の主たるものとなる。

友人である茨城県のT先生の実践していたテーマをお借りした。私たちの周囲には「この道具はお年寄りには使いにくくないか？」「このCMは差別ではないか？」「この標識は見にくくないか？」などといった問題が結構山積している。自分の周囲のものを批判的に見て，改善案をA4版４枚のWordによるレポートで客観的に述べる，という課題である。アブストラクト・キーワードも含め，読みやすくどこに出しても恥ずかしくないレポート・論文紙面を作る技術を身に付けることを期待している。章立て・節立て，引用・参考等著作権への配慮の他，Photoshopで使用する画像を最適化することも教えている。

○「Tipping Pointの秘密を探る！」

３学期の成績の主たるものとなる。

総理府統計局等で公開されているデータから興味のあるものを選び，折れ線グラフにして，その変化の理由を探り，A4版4枚以上のレポートにまとめる，という課題である。最初に，Excelによるデータの統計処理（平均・分散・標準偏差・相関係数等基本的な統計値）の基本を学ぶ実習を行い，その後レポートに取り掛からせる。ここでは，「仮説およびその検証」という論文における基本的

HANDA，Toru：早稲田大学本庄高等学院（埼玉県本庄市栗崎 239－3）

な論理構造を踏まえさせるようにしている（写真はそのときの授業風景）。また仮説を検証するためにはデータや資料収集が必要になるため，アンケートの処理，新聞・雑誌・書籍やネット情報等の資料の扱いについても触れている。ここで「朝日けんさくくん」）を利用している。

3　新聞記事データベースとしての「朝日けんさくくん」の利用

ある対象の時間的な推移に大きな変化があった場合，必ずその背景には理由がある。例えば「少年犯罪が××年を境に増加している」という場合，実際に犯罪数が増加していることもあろうが，状況がほとんど変化していなくてもその年に少年犯罪法の改正があり「犯罪」の定義が広くなったり，「少年」という年齢のくくりが広くなったという場合もあろう。それ以前に凶悪な少年犯罪が発生し警察に対する社会の批判が高まったため，検挙数が増えた，という場合もあるだろう。

少年犯罪の大きな増加という事実の理由への仮説として「携帯電話やスマホの普及がその背景にあるのではないか？」を立てるのであれば，携帯電話やスマホの少年に対する普及数の推移のデータを探さなくてはならない。法や解釈の変化やそれを引き起こした事件の存在を仮説として立てるとき，新聞記事データベースが使えることは大きな威力となる。ニュースとしてその事実を確認できるとともに，その後の世論や反響を追跡することができる。

ここでほとんどの生徒が新聞記事データベースを初めて利用することになる。使い方とその威力を知った生徒たちは，その後他教科で提出されるレポート課題，卒論等に利用していくことになる。

「朝日けんさくくん」の利用方法については，他教科教員に案内を行い，さまざまな教科で利用してもらうことができる。

4　中等教育における資料としてのネット情報の是非

現在，ネットワーク上には玉石混淆な大量のデータ，いわゆるビッグデータが転がっており，その利用が新しい研究テーマや起業につながるといわれている。しかし，中等教育レベルでは，課題研究の資料としてネット情報を自由に使わせることは望ましくない。学校のネット環境としてフィルターをかけている場合が多いと思われるが，仮にそうでなくてもアカデミックな場面において，参考や引用資料として利用し得る資料は限られる。本校では，Wikipediaや知恵袋はレポートや論文の参考文献としては使えないと指導している。ネット上の情報は膨大であり，その中のどのような資料が自分の研究テーマの裏付けとなり得るのか，を判断する力を養うのには少々時間がかかる。

そのような中，新聞は複数の目を経て社の責任の下に社会に発表されており，そのデータベースがレポートや論文の参考資料として使える環境は，実に教育的な意義が大きいといえる。欲をいうならば，新聞では同じ事件の報道に際して社毎に微妙に報道のニュアンスが違っており，それを踏まえながら資料とすることが理想である。しかし，一般の高校においてそのような予算を配慮する余裕はない。しかし，一社の新聞記事データベースが使えれば，当時の事件や世論を負うことができるし，事件からtwitterやスレッド等ネット上の議論の特性の分析等の研究に発展させることもできる。多教科の教材として広い利用が可能なことが魅力である。

5　さいごに

小中高大の生徒学生全てがデジタルネィティブであり，携帯端末としてスマホをほとんどの者が所有する現在，安直にネットで情報を得ることに疑問を抱かない状況がある。テキストや画像のコピー＆ペーストも簡単であり，生徒たちにはそのことへの罪悪感はあまりない。このような時代であるからこそ，教育現場で正しい情報とそうでない情報を教えることが問われている。同時に，情報の使い方のモラルが問われている。プロの研究者ですら，剽窃や盗作を行い，それが度々ニュースになっている。

ネット情報を使いこなすことはネットワーク社会に生きる人々にとって必須事項である。それ故，学校現場で資料の質や使い方のモラルを教えることが強く求められている。そのための教材として，新聞記事データベースは大きな意味を持っていると思っている。